

# 広島・黄幡おうばん一号遺跡

- 1 所在地 広島県東広島市西条町下見
- 2 調査期間 二〇〇二年（平14）四月～八月
- 3 発掘機関 （財）東広島市教育文化振興事業団文化財センター
- 4 調査担当者 岡野克巳・長友美穂
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期～近世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



黄幡一号遺跡は、陣ヶ平山から北に延びる丘陵の先端部に立地する。標高は約二一九mを測り、遺跡の現状は水田・宅地である。調査面積は約一九二〇㎡である。検出した遺構には、竪穴住居・溝状遺構・礎石建物・井戸・土坑などがある。礎石建物は、北側の一部が後世の攪乱を受けているが、八・一m×九・九m程度の規模であったと推定される。遺構に伴う遺物の出

土がないため、時期は特定できないが、その規模・構造などから、寺院である可能性が考えられる。江戸時代中期に編纂された『芸藩通誌』には、遺跡周辺にいくつかの寺院・寺院跡の記述が見られるが、いずれも遺跡の位置とは一致しない。

木簡は、A調査区のほぼ中央に位置するSK七（井戸跡）下層、検出面から約二mの位置から出土した。遺構は不整な円形の素掘りの土坑で、径は約一五〇cmを測る。木簡の検出位置から約一〇cm掘り下げたあたりから相当量の湧水が認められ、崩落の危険が憂慮されたため、掘下げは途中で断念せざるを得ず、底面の確認はできなかった。木簡以外の遺物は出土していない。

## 8 木簡の积文・内容

### (1) 仁王般若経□供養米」



286×10×6 051

上端を山形に削り、下端は尖らせる形状をとる。仁王般若経の転読札の可能性もあるが、供養米とあることからみて、転読の際に僧らに支給した米の進納に関わる付札、ないしその数量を書き付けた木簡であろう。

（岡野克巳）